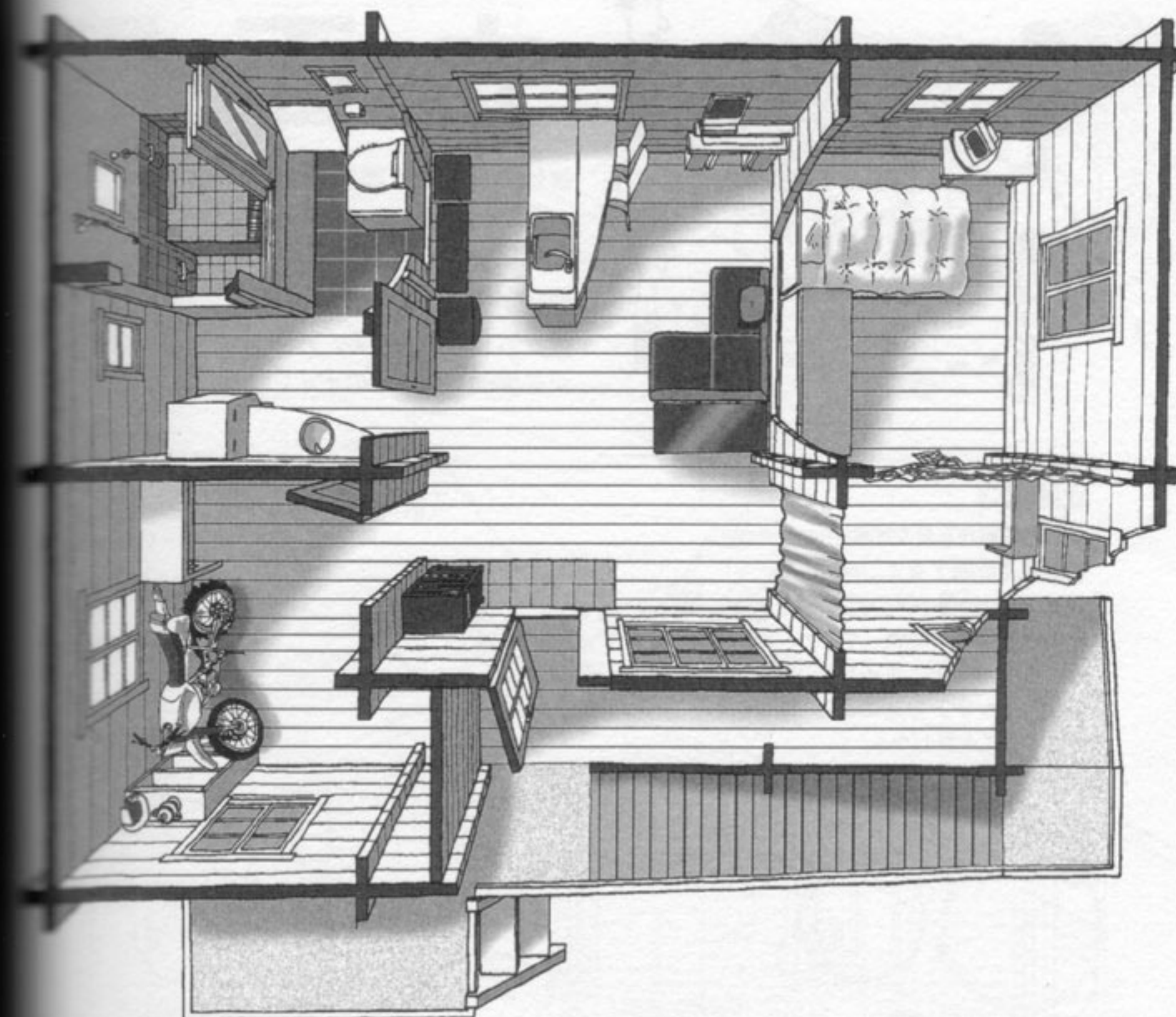


体に合うことと、人への思いやり
それが理想のバリアフリー住宅

バリアのない家づくりを考える

バリアフリー住宅とは本当はどういう住宅のことだろうか？ ただ単に段差がなければいいという考えから一歩進んで、だれにとってもいつまでも住んでいる人にやさしい家づくりを考えてみよう。



TALOのモデルプランを部分的に車椅子対応に改築した江幡邸。床面積63.4㎡、テラス面積12.2㎡の平屋建て



●玄関

玄関口は構造上、まったくフラットにすることができないため、江幡さんが少しの力で乗り越えられる高さ、2cmまでつづりを削ったという。玄関を入ると上がり框を上がらずに家に入れるが、脱ぎ場部分をタイル張りにして、フローリングのダイニング・キッチンと区別している。

●間切り・扉

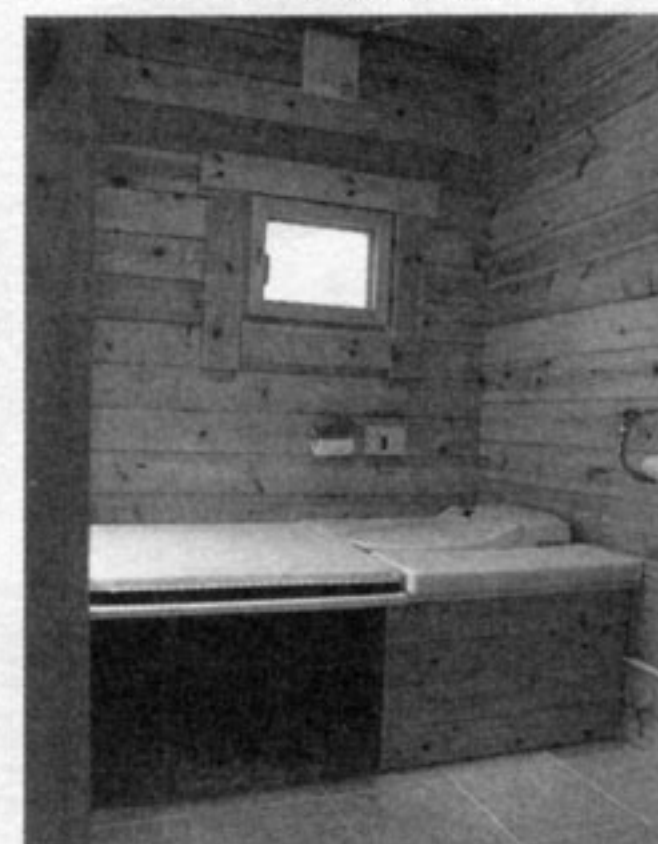
扉は、洗面所に入る引き戸と多目的ルームになっている部屋の開き戸のふたつのみ。どちらも段差はまったくない。残りの部屋は、カーテン代わりの布地で間仕切りをしている。布はカーテン以外でもインテリアとして使っていて、家全体を軽く開放的な印象にしている。

●スイッチ・コンセント

車椅子の高さに合わせ、スイッチやコンセントは床から約60cmのところに。が、この高さは意外と便利。PCなど電化製品のコードを下にはわせなくてもすむのだ。



上段左/浴室に入るために補助台を下ろした状態。上段右/トイレの床はタイル使用。下段左/洗面台の下はオープンになっている。下段右/洗いは上、浴室という一般住宅とは逆の発想の浴室



●お風呂・トイレ

車椅子の江幡さんが、ひとり暮らしをするために何度も設計図を描き直した結果、約10.8㎡の広いスペースに洗面所と、そしてガラス戸で仕切られた浴室。シャワーの付いた補助台がトイレの両側と前にある。浴室はトイレの前に付けたことによってそのまま入れるように洗い場が高い位置にある。

●アプローチ

家の前面はウッドデッキと玄関に続くスロープ。最初、スロープは前側部分だけだったが、それでは傾斜がきつすぎたため、一度直角に曲げて駐車場まで延ばした。来訪者はスロープの途中からステップで上れるようになっている。斜度は約7度。ゆるやかで歩きやすいが、車椅子の場合は、少しきついかもしれない。江幡さんは運動になるのであえて、この角度にしたという。



左/駐車場から延びるスロープ。幅約100cm。上/来訪者はこの角から上がる



茨城県那珂市 江幡隆司さん

webデザイナー。スポーツ事故により身体が不自由に。以前より憧れていたログハウスを自分の生活スタイルに合った形にデザインした。施工はTALO 茨城 吉田建設。

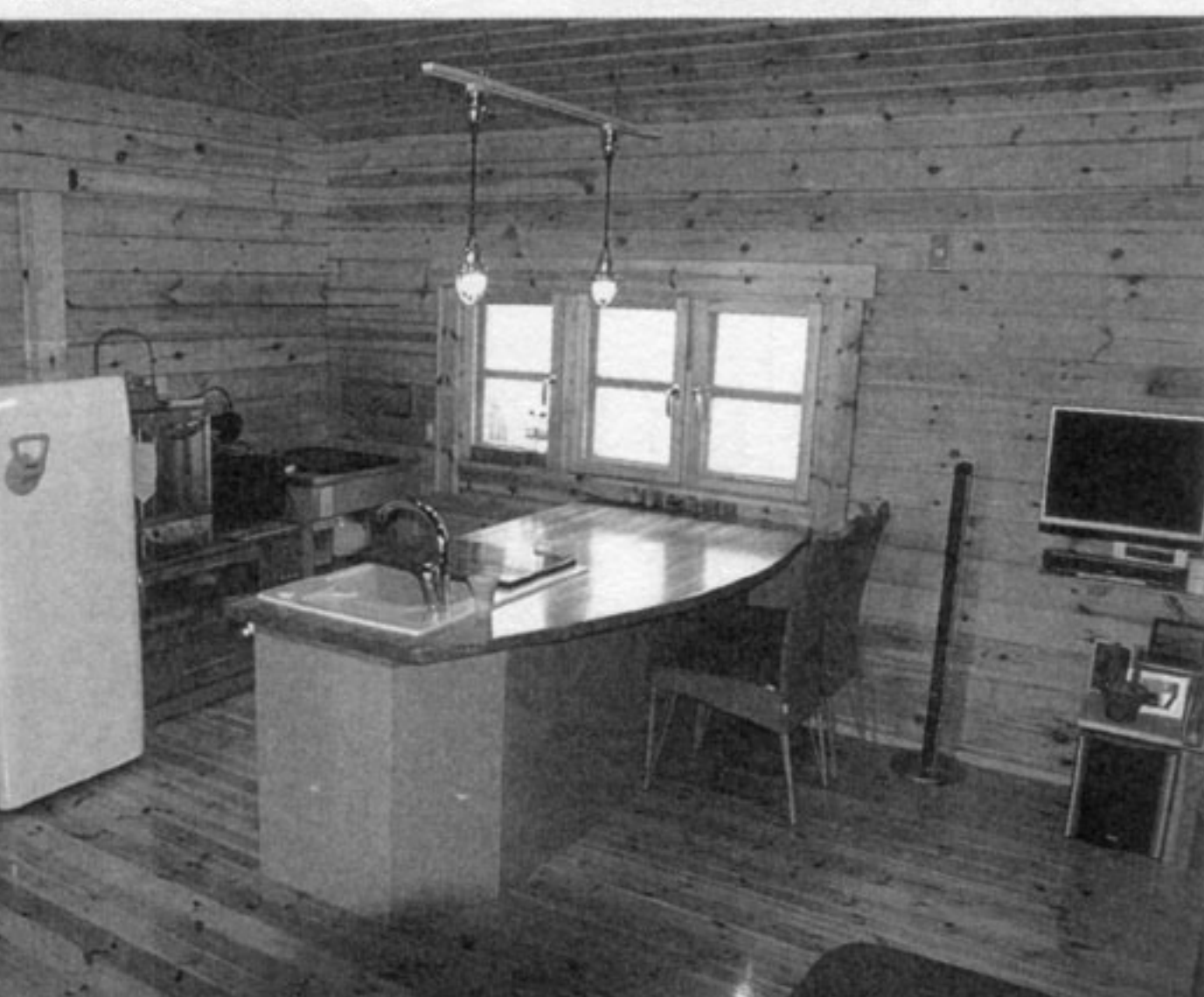
バリアフリー住宅とは障害物のない家のこと。それは物理的なことだけではない。たとえば老眼の人にはたった2cmの段差でも危険だし、足腰の弱い人には大きな段差が椅子代わりになるように、人によって障害物が違うからだ。車椅子で生活をしている江幡さんは、ひとりでも暮らせるように、みずから部分的に設計したログハウスに住んでいる。江幡さんにとって完璧なバリアフリー住宅だ。けれども、この家のすばらしいところはそれだけではない。「友人が大勢遊びに来るので、キッチン台を自分のサイズよりも少し高くしたり、浴室にお湯のためられる浴槽をつくったりと、本人以外の人にとっても快適に過ごせる家づくりをしているのである。その思いやりが、さまざまな物理的なバリアをなくす一番の策なのかもしれない。」「いまの自分には関係してくる人のことも考えた家。それが本家のバリアフリーなのだ。まずは江幡さんの家を見ながら、今



上段左/開き戸の幅は87cm。ログ・メーカーの規格のままで使用している。上段右/吊り戸なのでレールはない。下段左/寝室は厚手の布カーテンで仕切っている。下段右/PCなどを置いた書斎は薄手のカーテンでセミオープンに

●キッチン

インテリア好きな江幡さんが一番こだわったのは、実は食事をするところであり、友人が集まり会話をする場所、キッチンだ。スタイリッシュな形のアイランド・キッチン兼ダイニング・テーブルは、みずからデザイン。高さは江幡さんにはやや高め75cm。遊びに来る人たちにも使いやすいよう低すぎないようにしたという。



キッチンの通路は約90cm。低めの冷蔵庫や棚を配し換気扇はすっきりと壁に納めている